

日本の格差と貧困を読む全 30 冊

2008 年 2 月 25 日 手塚文雄理事

60 年代から 70 年代にかけ日本経済を牽引し高度経済成長を支え、新しい家族観や消費行動など、あまたの流行を生み出してきた団塊世代だが、その最後の年代の引退も間近い。会社人間として生き経済的豊かさを享受できたはずの彼等が、いま目にしているのは自らの経済基盤をひたひたと侵す社会の姿の波だ。波の名前は“格差と貧困”。この波は日本及び日本人を飲み込もうとし、我々は恐れおののいている。

明治 43 年に石川啄木「時代閉塞の現状」を著し、時代の暗雲に一矢報いたが、私たちもそのひそみに習いたい。静岡県労働研究所（静岡労研）は、01 年の発足以来、県下の労働運動の発展に資するため、労働経済研究や労働法制研究をはじめ、各種のフィールドワークに取り組んできた。さらには研究発表の場としてシンポジウムや講演会等も積極的に開催してきたところである。しかし“格差と貧困”は一研究機関だけでその全貌が計れるものではない。同問題への国民的関心と基礎知識を提供することも静岡労研の任務だと認識している。そこで一般書で同問題理解への足掛かりとなるべき書を推薦してみた。

まず最初に紹介するのは、①森永卓郎「年収 300 万円時代を生き抜く経済学」、②「年収崩壊」の 2 冊だ。①は、森永が国民的エコノミストとなる契機となった。「これからは生きがいや趣味づくりが大切。人生は経済的豊かさを追求するばかりじゃないよ」と言う主張だが、自分は高給取りなのに格差や貧困を生きがい論にすり替えているとの非難を浴びた。同書が出版された 03 年の国民平均年収は 420 万円。わずか 4 年後に書かれた②では、楽観的な生きがい論は全く影をひそめ、節税や賢いローンの借り方、節約方法など、どのように支出を抑えるかの記述が中心となった。この 2 書の比較だけで格差と貧困の広がりや速さが理解できよう。

格差と貧困を捉えた歴史的著作となり、その著作名が流行語となったのが、③山田正弘「パラサイトシングル時代」、④玄田有史他「ニート」、⑤門倉貴史「ワーキングプア」、⑥橘木俊詔「格差社会」だ。

③を再読してみた。当初のショックが消え、貧困を世帯で支えられることができた、よりましな時代だったんだという気持ちになる。それだけ貧困が進んだ証左か。④⑤は日本を大論争の渦にまきこんだ。ニートやワーキングプアの定義からその対策の是非、生活保護、社会保障、労働法制改革をめぐる論争となった。論争の前提となる政府の各種経済社会調査や統計の制度までもが論争の対象となった。ジニ係数という専門用語も注目をあつめた。⑥橘木は経済学者、統計を基礎に格差社会の存在を証明して見せた。やや上級向け。

論争の経過を見てみよう。⑦「論争・格差社会」、⑧中野雅至「格差社会の結末」、⑨「論争・中流崩壊」、⑩「論争学力崩壊 2003」が面白い。⑦⑧は小泉首相時代に書かれ、その論旨は前首相と同一である。いわく「格差の兆候はない」、「格差かに見えるのは調査統計の評価法の違いが理由」etc。ひどいものになると格差は昔からあり、少々の格差は経済活性化のために必要とまで言い切った。だが、福田首相が懸念を示し、政府が公式に対策を論じだすと、同論はバブルのようにはじけて消えた。

⑨は社会の二極化に警鐘を鳴らした。金持ちがもっと金持ちになることで二極化が進むのではなく、中産階級と呼ばれる厚い層をなす中間層の大規模な崩落によってもたらされていると断じた。⑩はかような中間層の下降化によって階層の固定化も生じ、低階層での

教養・学力低下は危機レベルにあるとした。低階層の増大が同層だけの危機に留まらないことは勿論である。

貧困と格差がさらに深刻化した社会はどのような社会なのか。そこに住む人々の暮らしはどうなってゆくのかに焦点を当てたのが、⑪橋本健二「階級社会」、⑬三浦 展「下流社会」である。格差社会の究極形態は一部富裕層と大多数の貧困層との二極化であり、これは階級社会と呼ばれる。全ての階層で全ての者が貧困化すれば、貧乏も金持ちもなく皆平等じゃないかというのは言葉のアヤにすぎない。国際的な比較をすれば下流社会なのである。

20 世紀は“革命と戦争”の世紀だった。革命を育てたのは貧困だ。仕事がなく明日への不安がやり場のない怒りに変わってゆく。社会は不安定となり、おびえる人々は革命という体制変革をのぞんだ。わが国においても静かにだが着実に格差と貧困は浸透している。いずれの日か国民から希望すらも奪われる時がきたら…。考えるだけに恐ろしいことだが、⑭山田昌弘「希望格差社会」はそんな社会の到来を予測する。

ところで、格差と貧困は誰に対しても突然襲いかかる。貴方に今日にでもふりかかるかも知れない。しかしその強弱、つまり影響力のあらわれ方は中高年齢層と若年層とでは一様ではない。⑮朝日新聞「偽装請負」、⑯宮本みち子「若者が社会的弱者に転落する」、⑰城 繁幸「若者はなぜ3年でやめるのか」は、若年層に集中してあらわれる格差と貧困問題を余すところなく描いている。

正規雇用者の解雇は最高裁判例によっても、また年功序列制度のもとでは中高年齢者の解雇は実質的に困難である。しかし経営者はその代替として柔軟な雇用、云いかえればいつでも解雇できる雇用を新卒者に求めた。後押ししたのが 86 年に制定された労働者派遣法だ。「働き方の多様性を確保」することがうたわれたが、⑮はそれがいかに虚偽だったかを伝える現場ルポである。

同問題の影響が若者に集中的にあらわれると言っても、中高年齢層が影響を免れる訳ではない。中高年齢側から積極的に生きがいを求め、豊かな老後生活を送るための処方箋を示したのが、⑱三田誠広「団塊老人」、⑲水木揚「人生後半戦のポートフォリオ」だ。老人といってもその期間は 20 年～30 年に達する。人によってはまだ長い。意識的な準備がなければ豊かな老後は夢のまた夢にすぎまい。

これまで格差と貧困を経済・社会現象として捉え、その分析と評価そして問題提起と解法をテーマにした著作や、いかに生きぬくべきかの方法論を述べたものを中心に紹介してきた。⑳高橋哲哉「教育と国家」、㉑斉藤貴男「教育改革と新自由主義」は、教育や思想面からアプローチした労作だ。

㉑の高橋は哲学者であり同書には格差と貧困には一切触れられていない。だが同問題を生み出す政策的要因として成果主義や行政改革、労働法制改革があり、こうした一連の政策の思想的背景をなすのが新自由主義（新保守主義とも呼ばれる）や新古典派経済学なのだ。高橋の新自由主義批判を通じることで、格差に対する新しい地平が切り拓かれるだろう。

㉑は平等社会を否定し、選民エリート教育によって社会指導者の育成をめざす日本の支配者たちを批判する。選民教育は階級社会を前提として成立つ。優勝劣敗の社会ダーウィニズムに無関心であってはならない。

支配層の生の声を聞きたければ、㉒安倍晋三「美しい国へ」が最適。ただし反面教師的

に学ぶだけなので新刊を購入する必要はない。ツタヤで 105 円で購入すれば充分。

雇用や賃金、あるいは法制度から“格差と貧困”発生のメカニズムを見てみよう。まずは㉓島田晴雄「日本の雇用」。島田は竹中平蔵や中谷巖らと並ぶ構造改革派の一人。同書は構革派の先駆的作品であり、同派の経済政策が総合的に眺められる。「失われた 10 年」以前の著作のためだろうか、成果主義導入による賃金格差の影響を過小に見ることで、年功序列賃金の欠点を成果主義が補佐しうるかのような無邪気な幻想論であった。隔世の感あり。

㉔木下武男「日本人の賃金」の読後は衝撃的であった。グローバル化する日本社会でありながら、賃金に関するグローバルスタンダードが無いばかりか、ナショナルスタンダードさえもない日本。賃金用語があいまいな定義と統一性がないまま語られている。賃金理解を阻む最大の要因は、知識と概念の共有がないことである。同書はまず日本の労働界幹部に読むことをお勧めする。

労働の商品化と雇用の融解によって「フリーター資本主義」、つまり反憲法的賃金労働が日本を席卷している。㉕中野麻美「労働ダンピング」は、正規雇用から非正規雇用への移行メカニズムを解明することで、市場によって商品化された賃金労働が値崩れを起こしていると説く。その影響は永続的かつ構造的であり、新しいパラダイムによる労働と社会システムの構築が問われている。

「福祉元年」と呼ばれた 73 年から 35 年が経過した。今やわが国はアメリカと並ぶ、いや一部指標ではアメリカを凌ぐほどの反福祉大国となった。その歴史的推移を㉖橘木俊詔「日本の経済格差」は描き出した。本書では最新の経済理論と実証データに基づく検証のみならず、税制や教育、社会保障、思想など幅広い社会分析が特徴となっている。

現代日本社会の病理をルポルタージュし、将来の日本が新自由主義に席卷された姿をイメージとして捉えた作品に、㉗佐藤俊樹「不平等社会日本」、㉘斉藤貴男「機会不平等」、㉙山田昌弘「新平等社会」がある。

自由と平等は今日では対立概念ではない。歴史的には両概念が対立的な時代もあったが、人間の進歩によって解消されてきたことは、フランス人権宣言を見るまでもない。身分社会や階級社会を打倒し、多くの差別や不公平、不平等を克服してきたのが近現代の歴史だった。

アメリカの経済学者㉚T・ヴェブレンは「有閑階級の理論」のなかで、労働せず消費するだけの有閑階級（レジャークラス）は永遠に進化する制度プロセスの頂上にあるとした。上位階級を規範とし理想化することで、それを見倣う下位階級が存在するからである。

同理論は日本に於いても妥当性を持ちえるのか。階層社会における上位概念である有閑階級の出現とその進化プロセスを理論化した同書は、日本の階層社会分析の上で重要な示唆を与えてくれる。

【資料：文献出版社一覧】

①光文社、②角川 SSC 新書、③ちくま書房、④幻冬社、⑤宝島社新書、⑥岩波新書、⑦文春新書、⑧ソフトバンク新書、⑨中公新書ラクレ、⑩中公新書ラクレ、⑪講談社選書、⑫平凡社新書、⑬光文社新書、⑭ちくま書房、⑮朝日新聞社、⑯洋泉社、⑰光文社新書、⑱新潮新書、⑲文春新書、⑳講談社現代新書、㉑寺子屋新書、㉒文春新書、㉓中公新書、㉔平凡社新書、㉕岩波新書、㉖岩波新書、㉗中公新書、㉘文春文庫、㉙文芸春秋社、㉚ちくま書房